The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大塚穎三名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2010, 60(2), p. 66-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

大塚穎三[†]名誉教授に聞く

－大阪大学の思い出－

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2008 年 12 月 9 日
於：大阪大学大学院経済学研究科（大阪府豊中市）

浪速高等学校に入学

阿部　本日は大塚穎三先生に，浪速高校時代を含めまして，大阪大学の思い出を語っていただきます。

大塚先生は，旧制浪速高等学校尋常科にご入学ののち進まれた高等科を昭和 24 年に卒業されておられます。7 年間という長い期間在籍された浪速高等学校へのご進学の理由，さらに高等学校の生活で印象に残っている思い出について，まずお話しいただければ幸いです。

大塚　なぜ浪速高校を志望したかというのは，ちょうど太平洋戦争が始まった直後で，普通の旧制中学校も挙げて軍国主義時代，軍事教練の達成だったのですが，この浪速高校の尋常科というのは，非常に自由主義の，当時としては珍しい自由闊達な教育機関でありました。

幸い入試に通りましたのですが，校長は第一声，この学校は帝国大学，いまの国立大学ですが，帝国大学へ行く人間を育てるところである。軍関係の人になろうというような人，つまり将来，陸軍大学とか海軍大学とかを目指すような人は，いま直ちにやめてもらいたいと。ちょっと軍人が聞いたら怒るだろうと思うのですが，不思議なことに，当時，配属将校でおられた大佐の方は即座に，私もまったく校長先生のご意見に賛成である。軍人ばかりをつくるのが能ではないということで，学問・研究を通じて国に奉仕する方が育ってもらえれば非常にうれしいとおっしゃったわけです。

そこまではっきりしたプリンシプル（principle）を持っている学校だということは，実は私は入学するまで知りませんでした。もっと目先のことに魅力を感じておりまして。というのは，これは七年制高等学校でありますから，中学校から高校への入試がない。旧制高校，一高とか三高というところへ入学するのは，もう大変な競争でありまして，何年も浪人しても入れないので自殺したというような話も聞いておりますが，それがないということがうれしかったのですね。

いわゆる高校への受験勉強をする必要がないということであって，尋常科生のころから，文系，理系の志望にかかわらず，たとえ将来，理科系へ進もうと思っている者でも，哲学とか文学とかのものを読む。逆もまたしかりで，文系志望の人でも，空いた時間を利用して高等数学を勉強したりすると，そういうところがあったわけですね。

それは非常に私の人生を左右するぐらいの影響を与えてくれまして，戦時中でもロシア文学を，トルストイ，ドストエフスキー，その他を片っ端から読んだり，日本文学では，夏目漱石とか芥川龍之介などは，ほとんど全部を読破で

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

きました。普通の中学校であれば，そんなことをしていたら受験勉強ができないので，高校へ入れないということがあったわけですが，そういうことが全然なかったわけですね。

それで将来の人生観は，現在でも変わらない教育理念を持っている。例えば一応，高等科へ進めば，文科，理科と分かれるわけですけれども，理科へ進む人間でも文系の素養がある哲学書，また，その逆もしかりという感じなのですね。

教養について

大塚　これはちょっと先走る話になりますけれども，結果的には，私は紆余曲折の末，大阪大学の教養部長という立場にあったわけで，ちょうどそれは教養部がなくなり，大学院大学化するときだったのですね。それで私は，文部省の大学課の担当者と，さんざん激論を闘わせたのですが，教養部をなくして大学院大学の一環とするということは，旧帝大については文部省の既定方針だということを言われたのです。

私は，それは非常に結構であると。結構というか，教養部をなくすことには賛成である。これも後で申しますけれども，実に教養部というのは矛盾に満ちたところで，研究条件は悪い，研究費も少ないというようなところで，これはなくさなければいけない。しかし，教養部をなくすということと，教養をなくすということとは，まったく別個なことである。教養をなくしたら，もう大変なことになる。教養というのは，生涯をかけて，自分で選んでやることであると。

実はそれにはモデルがありまして，フランスのパリにエコール・ノルマル・シュペリウール（L'Ecole Normale Superieure）というのがございます。これは直訳すれば，高等師範学校ということになるのですが，ここではずいぶんそうそうたる人が出ている。例えば，フランスの数学者で後世に名を残した数学者は，ほとんど100パーセント，ここを出ている。歴史に名を残す哲学者，デカルトとかパスカルとか，そういう人たち。

デカルトというのは，「我思う，ゆえに我あり」と言った哲学者ですが，数学者は数学者だと思っているわけですね。解析幾何学というのを発明した。パスカルというのは，『パンセ』で哲学者だと言われているけれども，これは数学者でもあるし，「パスカルの原理」という物理の圧力に関する原理を発見した人。それから，これは数限りないのですが，アンリ・ポアンカレという人は，のちにフランスの大統領になりますけれども，数学者としてのほうが有名である。

また，フェルマーという人は「フェルマーの定理」とか，「フェルマーの原理」とか。「フェルマーの定理」というのは，数学の$A^2 + B^2 = C^2$は3，4，5という整数か，あるいは5，12，13という整数の組しかない。ほかはいくら探してもないという原理を打ち立てた。

フェルマーは本職が判事なのですね。裁判官で法学の専門書を読んでいて，その余白に「フェルマーの定理」の証明を書いた。しかし，その余白が狭すぎて書けないから，これは書かないことにするという日記が残っているのです。

ところが，後世の人がいくらやってもできない。紙を1枚奮発して，きちんと書いておいてくれればよかったのでしょうけれども，その後，それを証明するのには200年かかっています。それは日本の数学者が証明したということを新聞記事で読んだことがあります。その論文自身は，私は難しくて，とても読めないのですが。

それから，光は直進するけれども，光は空気から水の中に入るときは屈折する。なぜ屈折するかというと，それは屈折したほうが目的地へ着く時間が短くてすむという。つまり最終点に到達するために，光は最短の時間を選ぶというのが「フェルマーの原理」なのです。

だから数学者でもあり，物理学者であり，そ

れも後世に永久に残るような大発見をした人が，実は本職は判事である。そうしたら結局，文系，理系の区別というのはないのではないか。つまり言い換えれば，文系の人でも理科のことをそれだけ，これは教養として身に付けている，逆もまたしかりという感じなのですね。

文部省は教養部を廃止すると言うけれども，仮に教養を廃止したら，そういう人は日本では絶対に出ないということになってしまいます。ただ，私はそこで文部省にだまされたというか，大学改革の原案を練るというのは，実は大学課の大学課長ではなくて，課長補佐ぐらいの30代の若い人だったのですが，「先生のおっしゃることはよくわかっている。実は大学院の大学にして，いわゆる大綱化というのをやるけれども，その狙いは，まさにそのとおりのことを目指しておるのであります」と。だから，これは先生の理想の幕開けなのだと。

それならばと思って，私は「仰せに従いましょう」と言ったのですが，結果的にはどうなったかと言いますと，廃止したのは教養部ではなくて教養であった。その廃止した教養のなかには，いわば専門基礎とでもいうべきものが含まれていた。

私は理学部しか出ておりませんけれども，いま理学部は大変なことになっているわけですね。例えば物理学科へ進学した学生が，入試のときに生物と化学で受験してきた。物理を知らずに勉強しないで入ってきている。医学部へ進学する学生が生物を知らない。

いま，それをどうやるかということで，大学教育実践センターが全学共通教育ということで，それを補おうとしているわけですけれども，失礼なことですが，現役の先生方で昔に教養として身に付けていた，例えば理学部の先生でも物理の初歩，初等物理というものを教えることのできる方が実際はいらっしゃらないですね。

経済学部なんかへ行くと，経済は昔と違いまして，いまは数学の知識がないといけないわけですが，その微分も積分も経済の先生方は，正直言ってほとんど教えられないですね。竹中平蔵みたいな人はどうか知りませんけれども。

それを補うために大学教育実践センターというのがあるわけで，いかに教養教育が大事であるか，専門基礎を含めた教育が大事であるかということです。大阪大学では共通教育賞というのができているのですが，それをいままでに受賞された方というのは，実は旧教養部に在籍された方々がほとんどなのですね。ひょっとしたら100パーセントかもしれない。第1回目の受賞者は3人おられたのですが，3人とも教養の物理の先生でした。

そういうことで，文部省は「おまえの理想をかなえるために教養部を廃止するんだ」と言われたのですが，実際問題としては，いっぱい食わされたという気がしております。

とにかく理系と文系を分離しないような，つまり，居ながらにして教養が身に付けられる，強制されなくても教養を身に付けるというような土台を与えてくれたのが，旧制七年制高校であったと言えます。これは結果論で，初めから，だからそこを選んだなんていうことは，とても言えないのですけれども。ただ訳もわからず，とにかく入試がないということだけで行ったわけですが。

いまのご質問は，そういうことでよろしいでしょうか。

戦時体制下の浪速高等学校

菅　時代が時代で，もう戦争の影響がかなり出てきていた時代だろうと思いますが，それなのに自由な教育がおこなわれていたということですが，戦争によって授業のカリキュラムがずいぶん変わっていたとか，そういう影響は，浪高の場合はあまり受けていなかったのでしょうか。

大塚　戦争の影響で，だんだん最後は学徒動員

というようなことになるのですが，授業ではなくて軍需工場へ動員されるということはありました。ただ，幸い私の学年は，それがほとんどなかったのですね。そういう要請があっても，校長や尋常科主事ができるだけ断ってきた。軍需工場へ行くのも大事だろうけれども，やはり勉強も大事だということで。

それから，戦時中の教育方針の一つとして国定教科書というのを使うように指示されたわけです。数学などでもそうだったのですが，当時の数学を教えていたのは尋常科の主事さんの冨熊雄先生という方で，これは差別用語になるかもしれないので悪いのですが，田舎の飛騨高山の中学生と，天下の浪速高校の尋常科生が同じ教科書で勉強するなんて，そんなばかなことがあるかと。「もう教科書は持ってくるな」と言われて，自分で教科書なしの独特の講義をなさったわけですね。

それで結局，ノートを取りなさいというわけです。ノートが取れるような，ゆっくりした口調で話されたのですけれども，後になって読み返して見ると，それは全部，完全な文章になっていて，そのまま本にしてもいいぐらいなのですね。幾何学でも，解析幾何学まで教えてくださった。理科の解析幾何学などは，普通の旧制中学ではそこでも教えてくれなかったのですが，やってくださったし，特に興味のある生徒が申し出たら，マンツーマンで高等数学の講義までしてくださったわけです。そのときの私のノートというのは，実は旧制浪高の資料室というか，いまイ号館（大阪大学総合学術博物館）のほうにありますが，そのどこかに残っているはずですね。

それで軍事教練はございましたけれども，もとからいる生え抜きの教練の先生というのは，非常に穏やかだったわけです。ただ終戦間際になって，新たに2人ほど若い少尉の人が追加で配属されてきました。この人たちは，もうむちゃくちゃで，暴力も振るうし，大変な目に遭ったのですが，ほんの一時期，半年ぐらいの間で，それ以外のときは教練の授業も非常に穏やかだったと思います。

もう一つ忘れられないのは，国語・漢文を教えてくださった先生です。そのころ，もう教科書はないのですが，『論語』『孟子』の講義を全部そらんじておられて，それを黒板に板書して解説されるという先生でした。

そして昭和20年6月に，いわゆるポツダム宣言がありまして，新聞には「これは黙殺」ということが出たのですが，その翌日，その先生は生徒を集めて「君たち，どう思う」と。「自分は，あの宣言を受諾すべきだと思う。この戦争は間違っておる。間違っていなければ，どうして君たちの親は闇米を買ったりするんだろう。正しい戦争だったら，腹の減っていることぐらい我慢できるはずだ。ところが，それをしないというのは戦争に対する疑いを持っているからだ」ということをおっしゃったわけです。

その当時，そんなことを言ったら大変なことになります。「もし，君たちが，あいつは敗戦主義者だ，非国民だと思ったら，憲兵隊へでも警察へでも通報してくれて結構だ。自分の首は諸君に預けておく」とおっしゃったわけです。

ところが，生徒は誰1人として，先生を裏切らなかった。それだけの信頼関係があったわけですね。そこまではっきりおっしゃった先生は少なかったのですが，もう1人，人文地理の先生で，「この戦争は少なくとも勝てない。せいぜい言えることは，いかにして負けぬかということだ」と，これはもう言外に必ず負けるということを言っているわけです。そういう先生に恵まれていたということですね。

当時，教員の身分には2種類ありまして，教授と教諭という。教諭というのは尋常科だけしか教えない，教授は高等科を原則として教えるけれども，場合によっては尋常科も教えるというかたち。尋常科主事をやっておられた先生は，身分は教授だったわけですよね。だから両

方教えておられた。

教授の先生方のなかでは，正直言ってはっきりと「この戦争をやめろ，間違っておる」ということまで断言された方はいらっしゃらなかったですね。むしろヒトラー礼賛，それからスターリン礼賛というような方もおられた。しかし戦争が終わると，そういう方は，くるっと180度，転換された。ところが戦争中から，その戦争は間違っておるとおっしゃった方は，何一つ言わずに，黙って教諭の身分のままで他の中学校へ転出していかれたわけです。そういう素晴らしい先生を，尋常科は抱えていたというしだいです。

浪高と阪大の統合

菅　先生が浪高をご卒業になるころには，旧制高校自体がなくなるということで，浪高自体が大阪府立なものですから，府立大学になるのだとか，いや，阪大と合併するのだとか，いろいろな噂が飛び交ったのではないかと思いますけれども，阪大との合併の問題についてのご記憶に残っている，印象に残っていることをお話ししていただければと思います。

大塚　これは忘れようとしても忘れられないわけで，生徒，それから先輩を通じていろいろ，下手をしていたら「マッカーサー憲法」ではないけれども，浪高は高等中学校になってしまう可能性もあると。しかし，やってきたことは大学に準じた教育を受けてきたというわけで，大阪大学との合併というのを生徒は一般的に漠然と希望しておりました。

生徒大会を何度も開きまして，生徒なりに対策委員会なるものを組織しました。私は最高学年だったものですから，そこに入って副委員長格として，委員長格の人と，なぜ阪大との合併を希望するかというような陳情文を書いて，大阪府会で知事とか府会議員に配ったりもしたわけです。

ちょうど，そのころに校長の交代がありまして，以前の安達（貞太）校長という方は勇退されて，大阪府から森河敏夫新校長がみえたのですね。そのときに校長排斥運動というか，校長受け入れ拒否という意見がかなりあって，何度も生徒が生徒大会を開きました。

ただ何度もやった，何度もやった生徒大会のときに，1人，名議長がおられました。のちに東大の理学部へ進まれた藤田宏さん。この方は尋常科の教頭をやっておられた藤田義郷先生のご子息です。藤田義郷先生は，昭和20年6月7日の豊中一帯がB 29の攻撃を受けたときに，直撃弾を受けて亡くなられたのですが，その遺児なのです。

非常によくできた方で，「生徒大会では，拍手，やじを一切禁じます」と宣言された。そうしたら生徒の1人が怒って，「議長，拍手がなぜいけないんか。やじはいかんと思うけれども，拍手はええんじゃないか」と言うと，ただ一言，「拍手がいけないのは，やはり議場をアジテートし，混乱させるからです」と言われた。その手を挙げた生徒は，なおも食い下がろうとしたのですが，「いけません」という一言で沈静化した。

そこには森河新校長予定者も出席されて質疑応答があったのですけれども，途中で議長は，これで打ち切るということで，森河新校長に対して「どうもありがとうございました。これ以上の質問は，森河先生に対して礼儀を失する恐れもあるので，私の判断でやめました」と。その議長の影響があったのかどうか，最終投票では結局，新校長支持の票が上回りまして，森河新校長が着任されたわけです。

阪大との合併問題が表に出てきたのは，たしかその後だったと思うのですが，いまから考えますと，それは実は大阪府と文部省との間であらかじめできた路線であって，合併をスムーズにするために森河新校長が送られてきたのではないか。結局，その合併の事務能力が抜群とい

うことを買われたのではないかと，いまとなっては思うのです。ご出身は大阪府の庶務課におられた方で，ちょっとアカデミックというよりは，むしろ事務能力に長けた方だったと思われます。

そういう方ですから，合併対策委員に対しても非常に同情的でありまして，ある日，「ちょっと，来たまえ」と校長室へ呼ばれて，「君たち，運動するのにお金も必要だろう。足代もかかるだろう」ということで，裏金だったか何だか知りませんけれども，金庫番に言ってお金を出してくださった。そのおかげで，梅田から大阪府庁へ行くのに，それまではテクシーで行っていたのですが，大阪市電に乗る足代や阪急電車の運賃なども助かったということ。

そして合併が成立して，森河校長としては，初めから決まっていたわけで，生徒がやっているのはままごとみたいなものだというのが本心だったと思うけれども，生徒諸君の努力のかいもあってと花を持たせてくれました。そういういきさつがございました。

大阪大学理学部に入学

阿部　阪大時代のお話に移らせていただきます。先生は昭和24年4月に旧制阪大の理学部物理学科に入学され，昭和27年に卒業されています。大学生活で印象に残っている思い出についてお話しいただきたく思います。

また，昭和24年には新制大学が発足し，同じキャンパスのなかに旧制と新制の学生が混在する状況が出現したわけですけれども，旧制の学生と新制の学生とはどう違っていたのか，制度の異なる学生たちの間に交流があったのかなどについてお話しいただければ幸いです。

大塚　実は理学部は当時，中之島にございまして，私は中之島へ行ってしまったので，そこで豊中キャンパスとはおさらばしたわけです。

豊中キャンパスには，旧制高校最後の学年が残っておりましたが，まだ旧制高校の3年生がいる間に新制大学が発足して，それより1年下の連中が阪大へ入学すると，先に角帽をかぶったのですね。いま角帽なんてかぶる学生はおりませんが，当時は制服・制帽がありまして。だから非常に具合が悪いことが起こったのではないかと思うのですが，実際問題として学力は旧制高校の3年のほうが上で，それは新制大学の1年生もきちんと自覚していたので，何らいざこざもなかったように聞いております。

私は豊中キャンパスから離れておりましたので，詳しいことは聞いておりませんけれども，非常に円滑にいっていたのではなかろうかと思いますね。

阿部　物理学科の先生方あるいは授業のご記憶はいかがですか。

大塚　あのころの阪大の物理の教授スタッフというのは，素晴らしい方がおられまして，例えば菊池正士教授。この方は昨日の『朝日新聞』にも出ておりましたけれども，いわゆる阪大素粒子の伝統をつくった仁科（芳雄）先生の一の子分。

それから応用物理は淺田常三郎先生，物性物理は伏見康治先生，この方は先日お亡くなりになったのですが。その昔は，湯川（秀樹）先生とか坂田（昌一）先生，武谷（三男）先生，みんな阪大にずらっとそろっておられる。これは物理だけの話ですが，化学でも仁田（勇）先生等々，数学にも正田建次郎先生，南雲道夫先生とかがおられて，もう素晴らしい状況。

ただ何というか，研究者としては素晴らしかったのですが，非常に教育熱心だった先生と，もう教育なんかしなくてもよろしいのだという先生。諸君が図書館へ行って自分で勉強してもらえばいいんだ，それが大学だというふうに宣言して，講義はするけれども，非常に要領よくというか，3時間の講義を1時間半で切り上げるとか，休講がすこぶる多い，東京へ行ってきましたというような方と，両方に分かれる。

研究者としても超一流でありながら，非常にまめに細かな教育をなさった先生もいらっしゃいます。この先生はお名前を申し上げてよろしいかと思いますが，永宮健夫先生。私は永宮研究室へ入れていただいたわけですが，当時，湯川先生がノーベル賞をもらわれたということがあって，10人以上の学生が素粒子を目指した研究室へ入り，永宮研究室へ入ったのは私ともう1人，2人だけだったのです。素粒子のほうへ進んだ人たちは全部，事実上，就職を棒に振りました。素粒子をやっても，どこも雇ってくれないです。

私は頭が悪いから，とても素粒子なんてやってもしようがないというわけで，しょうことなしに物性論をしたわけですが，ある日，永宮先生に部屋へ呼ばれまして，「君，卒業してどうするつもりだ。就職ですか，それとも学者希望ですか」と。「なれれば学者になりたいけど，ちょっとそれは無理かと思います。まあ3年ぐらい，どこかのお嬢さん学校の教員でもして，その間に芽が出なかったら，もう大学を辞めます」と言ったら，永宮先生はにやっと笑われて，「君，自分で思っているほど頭は悪くはないよ。そこそこの能力がある。どこかから推薦の依頼が来たら，私はいつでも推薦状を書くよ」と言ってくださった。その時ぐらいうれしかったことはないですね。

その約束を守っていただいて，私が学部を卒業すると同時に大阪市立大学の助手に推薦してくださって，そこで教員になったわけです。ですから私は，旧制でも新制でも，大学院生活というのを全然経験していないのですね。学部の学生から，いきなり大学教員ということになりました。

大阪市立大学に就職

阿部　大阪市立大学の話に移らせていただきますが，そこでお仕事をしておられて，大阪市大と阪大との雰囲気や学生の気質などの違いはお感じになりましたか。

大塚　これはございました。曲がりなりにも大阪大学というのは国立大学で，全国から学生が集まってきているということで，そういうよさがあったのですね。それぞれのお国，北海道の人はいなかったけれども，関東の人，南は沖縄から来た人もおりました。それに対して市立大学というのは，市民の大学ということであって，非常にローカルな特色。庶民的なよさというのはあったのですが，それはそれで非常によかったと思います。

阿部　先日ノーベル賞を受賞された南部陽一郎先生も，そのころおられたのでしょう。

大塚　南部研究室は素晴らしい研究室で，南部陽一郎先生を筆頭に，助教授に宇宙線の早川幸男先生，亡くなりましたけれども。それから講師に山口嘉夫さん，助手に西島和彦，中野董夫。この方全員が昨日の『朝日新聞』に載っておりましたが，日本の素粒子論のピークが大阪市立大学にありましてね。

また，ノーベル賞こそもらわれていないけれども，渡瀬研究室という宇宙線の研究室の渡瀬譲先生。大阪市立大学の学長もされて，早くに亡くなったのですが。そのお弟子のなかには小田稔さん。この方も亡くなったのですが，何か文化勲章や学士院恩賜賞をもらわれたのではなかったですかね。

それから例の福井（崇時）・宮本（重徳），FMチェンバー（スパークチェンバー）という，いわゆる泡箱なのですが発明されて，これはいろいろな賞をもらわれましたね。仁科記念賞，朝日賞，最後は文化勲章までいったのではなかったかな。いまは展示用のものが理学部の玄関にあって，宇宙線が来ると，ぱっと光るのがあります。

ほかでは，例えば生物学なんかでも，私は直接習っておりませんけれども朝山新一とか，のちに国立民族学博物館の館長になられた梅棹忠

夫とかいう先生がおられましたね。

阿部　物理などの分野で有名な先生方がおられたなかで，阪大の研究室から移られた方もかなりおありだと伺ったことがございます。小田稔先生も阪大のご卒業ではありませんか。

大塚　そうです。それから渡瀬譲先生は出身が東北大学ではなかったかと思う。最初から阪大で教授だったのを，そのまま横滑りでいかれました。それから南部研では，亡くなりましたけれども中野董夫先生，この方は阪大出身で，西島先生は東大ですけれども，学位は阪大で，学位の審査委員は私の恩師の永宮先生。だから，言うなれば兄弟弟子になるわけですね。

阿部　その当時は，阪大はもちろん大阪市大あるいは名古屋大学など比較的西のほうの大学で，のちにノーベル賞などに結びつくような素晴らしい成果，あるいは人材の育成が着々と進んでいた非常に幸福な時代だったのかと思ったりしますが。

大塚　そうですね。京都大学の人が聞いたら怒るかもしれないですが，外国からビジターが来て，阪大を訪問したいという人はいても，京大を訪問したいという人はあまりいない。文系は別ですよ。少なくとも物理とかそういうのに関しては，みんな大阪へ来ましたね。

ついでに大阪市大も訪問してくれて，先年亡くなりましたけれども，トランジスタを発明したり，超電導理論を発明したバーディーン（ジョン・バーディーン）などは，私のいた研究室に来ておりますね。それからもう1人，トランジスタを発明したブラッテン（ウォルター・ブラッテン）という人も。この2人は阪大よりも大阪市大に興味を持ったというほど人材がそろっていたかと。私は一介の助手だったわけですけれども。

大阪大学理学部に赴任

阿部　先生は，大阪市立大学には，ちょうど10年間おられたのでしょうか。昭和27年に卒業されたのち昭和37年まで在籍されて，その年に阪大理学部に赴任されたというご経歴ですね。阪大理学部は，昭和39年から41年にかけて中之島から豊中に移転しております。理学部の移転につきまして何かご記憶がおありですか。

大塚　私は理学部へ中之島時代に入ったわけですけれども，ちょうど第2室戸台風がありまして，地下室が水に浸かり，いろいろな装置が全部だめになったということで移転促進になったわけです。私は水に浸かった後の地下室で1年足らず実験をして，それから建ちかけの豊中キャンパスの物理教室へ移ったわけですが，理学部移転の第1号でございました。ですから，いま改装中の理学部の一部しか，まだ建っておりませんでした。

菅　中之島と豊中では立地が異なるということで，先生自身が中之島時代に学生として過ごされたときと，助教授として豊中での学生を見て，その違いというようなものを感じられたことはございますか。気質とか生活態度で。

大塚　それはまったくございませんね。

菅　移転によって研究の環境とかというのは，中之島時代よりはよくなったのでしょうか。

大塚　ええ，それは格段によくなりましたね。いい仕事もどんどん出まして，*Physical Review Letters*という，当時，物理では最高と目されていた雑誌，いまの*Nature*みたいなものですね。それに載せる論文の第1号というのは，ちょうど移転した年，1964年に投稿して採択されて，「どんなもんだ」と言って威張った記憶がございます。

大阪大学教養部に配置換え

阿部　先生が教育者としておそらく一番力を入れられた教養部のお話に移らせていただきます。先生が教養部に配置換えとなられましたの

は昭和43年で，ちょうど大学紛争にかかりますが，紛争をちょっとのけまして，教養部にお替わりになったことによって，理学部時代と比べて教育・研究面で先生ご自身に大きな変化がおありだったのでしょうか。

大塚　実は理学部の助教授から教養の教授になるというので，これはプロモーションであるというふうに言われたのですが，私は教養の教授になるぐらいだったら，理学部の助教授のままでいいと言って駄々をこねたのです。

というのは，研究条件が月とスッポン。教養部というのは教育だけしておればよろしいのだということで，だいたい教室はあっても実験できるような研究室がないのですね。それから研究費は，一方は講座研究費，片方は学科目制ということで，うんと違う。

それから人員の面でも，学部のほうは学生5人に対して，教授，助教授，助手2人という配置ですが，教養部は学生40人に対して，教員は教授または助教授1人。教養課程は2年ありますから，実質20人に1人なのですが全然違うわけですね。だから，そんなところで身分だけ教授になっても，ちっともうれしくもないと言って駄々をこねたわけです。

しかし，ごく一部でしたけれども，教養部の物質的条件をよくしようという努力はなされておりまして，すでに理学部あたりのピカイチ級の助教授を送り込んでおられました。私はピカイチの1人，ピカニかピカサンか知りませんけれども，そういうふうに見なされたのか，やはり教養部をよくしようという条件のもとに送られたのだと思います。

幸い先輩の方々というのは，非常に物質的には苦労をなさいましたけれども，そのなかで素晴らしい仕事をなさいました。例えば，まだご存命ですけれども，世界一の分解能を持つ質量分析装置を製作された松田久先生。これで仁科記念賞をもらわれたわけですが，その質量分析器というのは，旧制浪高の尋常科の校舎の便所を塗りつぶして，その便所の跡へ備え付けられた。そこで最高のデータを出されたというような，そのぐらいの苦しい努力をなさっておられるわけです。

私はそこで実験をしましたけれども，実験室といっても窓が閉まらないような実験室で，非常に苦しい思いをしたのですが，幸い研究費などはずいぶん恵まれたというか，今年は頭は使うけれども金は使わないことにするから研究費を全部使ってくれという先輩が複数おられまして，そのおかげで，ちょっと教養部では理学部の人でもうらやむような設備を整えて仕事もできたし，これは先輩のおかげだと思っております。

大学紛争について

阿部　先生が教養部に移られて間もなく大学紛争が起こります。特に昭和44年1月には教養部が封鎖されておりますが，大学紛争の思い出をお話しいただけますか。

大塚　これは忘れようとしても忘れられない。教養部というのは，たしかにイ号館，ロ号館というのが真っ先に封鎖されて授業ができなくなったのですが，不思議なことに私のいましたニ号館，つまり物理教室ですね。いまはなくなっていますけれども，これは，あまりにも建物がみすぼらしいので封鎖のしがいがないと思ったのか，最終的には一時的に封鎖されましたが，それより先に基礎工学部や理学部のほうが封鎖されたことがあります。

いわゆる全共闘系の学生というのは，たしかにゲバ学生とも言われたわけで，それから民青系というのは当時は代々木系というか，共産党本部が代々木にあって，いろいろ暴力沙汰や血なまぐさいことも起こりました。

そのとき，全共闘系の学生を相手に大衆団交というのですか。そういうので私は呼び出されて糾弾されたことがあるのです。そのときの詳

しい様子というのは，これは浪高の同窓会誌ですが，実は物理学会誌に書いた私の原稿が転載してあるので，これに書いてあります（「改めて大学教育を問う」待陵編集委員会編『待陵 第11号　創立80周年記念号』浪速高等学校同窓会，2008年，『日本物理学会誌』62巻1号より転載）。これを詳しく話し出すと時間がなくなるので，もしよければコピーして。

阿部　読ませていただきました。

大塚　ああ，そうですか。それに書いていますように，3人の教員が立たされて，「教育者として，いまの大学の状況をどう思うか」と中核派の学生が突っ込んでくるわけですよね。それで私は，「私は自分が教育者とは思っていない」と答えたのです。そうしたら，ぽかんとしていました。

それまでのいろいろな先生のなかには，教育的見地からとか何とかという返答をする人はいたのですが，自分は教育者ではないと宣言したのは私が初めてだったらしくて，「では教育者ではない人が教育をやっているというのは，いったい大学とは何ですか」と聞いてきた。私は破れかぶれで，「大学というのは研究をするところだ。もっとはっきり言えば，研究エゴイズムを貫き通すところだ。研究エゴイズムがどういうものかということを知りたければ，俺のやることを見ておれ」と開き直ったのです。そこに書いているでしょう。

そうしたら，中核派の学生は黙ってしまったのですね。それでノンセクトというか，まともな学生がびっくりした。そこには私と助教授の人が2人いて，1人は越田豊さん。教養部長，図書館長もされていて，もう亡くなりましたけれども。その方と，もう1人は経済学者の齋藤謹造。この3人。

学生は3人にそれぞれ聞くのですね。それまでの受け答えは全部，私1人がやっていたのですが，大学とは何かという質問は3人がそれぞれ答えてくれと。越田さんはバランスのとれた方で，「私は大塚先生ほどスパッと言えたら非常にうらやましいのですが，そこまでは言い切れない。まあ研究半分，教育半分ぐらいかな」と。最後に齋藤謹造さんははっきりと，「私は大学というのは教育するところ，教育の場だと思っている」と言う。

でも，時間がたっていましたし，私は早く切り上げなければいけないと思ったから，「こうして3人が3人，みんな意見が違う。しかし，意見が違う人が共存できるところが大学だ」と。これは，われながらうまく言っていたと思うのですが。

それで学生は，ぽかんとして解放してくれました。いまから考えると，やはり研究エゴイズムを通せと言ったのは，湯川（秀樹）先生流の研究至上主義の考え方であって，最後の齋藤謹造氏が言った教育するところだというのが“we are paid for teaching.”で，これが本当は正解だと思うんですよね。

いまは正直言って，研究至上主義ならまだしも，ひどいところは論文至上主義というか，論文の数で人事を選考する。これは全部ではないかもしれませんが，少なくとも第一段階で最初にふるいをかけるのは論文の数で，この人が多いというので，そのなかで目ぼしいものの内容について検討しようではないかという，そういう傾向が非常に強いと思います。

それなら，まだいいほうで，もっとひどいのはデータ捏造とか。捏造で，嘘でも何でもいいから，とにかく論文の数を増やすという傾向があるのは，ちょっとどうかと思いますね。

言語文化部・健康体育部の独立

阿部　教養部からは昭和49年に言語文化部，昭和56年には健康体育部が独立して設置されます。これらの独立の事情につきまして，お話しいただけますか。

大塚　とにかく教養部というのはなくさないと

いけない。なくして，当時の体制としては，専門に応じた学部分属というのが大部分の教官が希望していた方向だと思います。

そのときに一番困るのは，外国語の先生というのは専門から言えば文学部だろうと。ところが文学部の語学の先生は数が非常に少ない。2講座か3講座しかない。そこに，どっと20人，30人の先生が行ったら大変なことになるということで，文学部の先生は絶対に反対だと言われるわけですね。だから結局，教養部解体の障害になる。

それから体育にしても，体育の先生というのは学部にいらっしゃいませんね。だから，この2つを何とかしなければいけない。

はっきり言えば，教養部をなくすために外国語の先生を追い出さなければいけないということで，言語文化部という組織を別につくったわけですね。文部省は最初は非常に冷ややかで，言語文化部が失敗だったということは1年たったらわかったなんて言って，それは非常に苦しい時代があったとは思うのですが，いまはどんどんいい人が育って，独立大学院でドクターコースまでできましたよね。そして文学部とは地位が逆転してしまっている。ですから，決してあれは失敗ではなかった。言文というのができたのは全国で初めてですよ。やがて東大がまねをして，みんなまねをしました。

今度は外大（大阪外国語大学）と合併するわけですが，まだ先ほどおっしゃったように，一種の差別意識というか，外大の先生方はだいたい外国語学部ですか，学部教育中心，こちらは大学院中心だと言うことで，また格差みたいなものを。格差というのは，初めからあるのではなくて，人間がつくるのですね。そういう傾向が，ちらっとあるかのように伺ったので，それを心配しているのですが，それさえなければね。それはやはり間違っているので，外大の先生方も研究・教育と両方できるような環境をつくっていくべきだと私は思うのですが。

菅　言語文化部ができたのは昭和49年と，わりと古い時代なのですが，そのときから，もうすでに教養部解体を見越して，まずは数が多い語学の先生の行き先からということなのでしょうか。

大塚　はい。結局，その教養部解体，分属というのに一番反対だったのは文学部だったわけですが，結果的にはそれは成功だったと思うし。

ただ健康体育部のほうは，独立して，ずいぶんいい人を人事もしたのですが。

教養部長として

阿部　先生は平成2年から平成5年まで教養部長を勤めておられます。この間，平成3年には大学設置基準が大綱化されて，一般教養科目が消滅しました。この変化をどのように受け止められ，どのような対応をされたのか伺いたく思います。そのほか，教養部長として重点的に取り組まれたことがおありでしたら，ご説明下さい。

大塚　これは最初のころに少し申し上げたのですが，私は大綱化というのがよくわからなかったので，それでずいぶん文部省の大学課長補佐とやりあったわけです。

一般教養という言葉の定義も実はあいまいだったのですが，一般教養というのは，2年間という限られた期間に，建物のなかに学生を閉じ込めて，やれ人文何単位，社会何単位，自然何単位を取ったら学部進学の資格が得られるという。そんなものが教養ではないはずだと。これは一生を通じて自分で求めて身に付けるはずだということで，そこのところを保障してくれなかったら，私は大綱化に反対だと言ったのです。

そうしたら文部省の答えは，それを尊重するのが，まさに大綱化の趣旨なのだと言われた。これはリップサービスというか，何が何でも自分の意見を通したいというのでペテンにかけら

れたのだと思うのですが，それを目的にやるのだと言われたら，こちらはそれ以上反対できない。それで納得した。

そして見事に期待を裏切られたという感じで，それの手直しを，いま大学教育実践センターで一生懸命やっておられるようですが，先ほど申し上げたように，共通教育賞というのをもらった人は旧教養部出身の人がほとんどだというような現状だと。これから先，果たしてどうなるかというのは非常に心配ですね。

私が「エコール・ノルマル・シュペリウールを模範とする」と言うときに，総長は「東大だったらできるかもしれないけど，阪大は人材がないから無理だ」と言われたのですが，私は実は事務長を連れて実地見学に行き，向こうの学長とも半日懇談したのです。それで見たのですが，正直言って，スタッフにたいした人はいない。研究者としては二流ぐらい，もしくはそれ以下の人。けれども，素晴らしい卒業生を育てることはできる。

だから教養部の新しい組織にしても，それができないというのはおかしいではないかと反対したのですが，さすがに総長も「うん」と言わなかったし，やはり大学院大学という美名にひかれて，そちらの方向へ行ってしまい，そして大綱化は教養を重視するものだという約束は文部省も破ってしまったわけですね。

いま旧教養部出身の方は，副学長になっている高杉（英一）さん，それから理学部に下田（正）さんとか。物理では，その２人が出てしまわれたら，もう教養とは何かということがきちんとわかる人はいなくなってしまう。すると非常に大学教育実践センターの運営も難しくなってくるのではないかと。

ただ，いま来られた実践センター長の工藤（真由美）先生。あの方は非常に教養に対して，そういったことをよく認識しておられて，この前，私も面談に行ったときに，例のノーベル・プライズ・ウィナーが“we are paid for teaching.”と言ったという話をしたら，「それは下田先生から伺いました」と。私が言ったことを下田くんが覚えていて，それを彼女に教育したらしいのですね。

だから工藤先生が頑張っておられる限りは，いいほうにいくのではないか。研究第一，「少なくとも，いまの大学の認識は研究至上主義ではなくなって，教育あっての研究だというふうになっています」とおっしゃっていましたので期待したいです。そこから後はわかりませんね。でも，それに感化された人が育ってくれば。

それと総長が非常に教養豊かな総長（鷲田清一）になったということで，うまくいけば日本一の大学になるだろうと。学生の数は日本一なのだそうですが，量，質ともに日本一になることを祈るのみですね。

教養部長の時代に一番難儀したのは，当時，教員というのは自分のことしか考えない人が大部分だった。つまり学部へ行きたい，教育なんかどうでもいいのだ，それが第一だと。夜中に電話をかけてくるんですよ，「改革はどうなっていますか。私は学部に行けるんですか」と。あなたのことなんてどうでもいい，まず教育をどうするかということが先決問題なのだというふうに言うと，怒って向こうは電話を切ってしまうのですね。

私が教養部長になったころには，評議員の方で，お辞めになられた，哲学者で大峯（顕）先生という俳句で有名な先生がおられて，この方は非常に協力してくださったわけですが，その次の評議員選挙でメンバーが替わってしまったのです。

そして今度は理科系の，名前は申しませんけれども，評議員の方。この人は「大阪大学というのは大阪理工科大学でいいんだ。文科系なんかどうでもよろしい。文科系をいつ切り捨てるかということが教養部長の使命だ。その時期をはっきりしていただかんかったら一切お手伝いできません」と言うのですよ。

文科系を切り捨てるなんて，とんでもない話だと思ったので，それはイエスとは言わなかった。そうしたら，あらゆる面で足を引っ張られました。それで腹が立って，辞表をたたきつけて部長を辞めようかと思ったら，そのときの事務長の辻仁さん，のちに（微生物病研究所の）事務部長になられた方ですが，その方が「先生，たとえ全教官がアンチ部長になっても，事務官一同は先生と心中しますから，どうかあと１年頑張ってください」と。その後，ちょっと落ちが付くのですが，「部長で退職するのと，いま放り出して平教授に戻って退職するのとでは，退職金が１千万円違います」と言うのです(笑)。

これは決め手になったと言ったらおかしいけれども，結果的に私はもう１年，もう針のむしろのようだったけれども，踏みとどまりました。

おかげで，いま私は体調の具合もあって，阪大病院には通い詰めに通っているのですが，行ってお金を払おうと思うと，「先生，今日のお支払いは無料でございます」とか何とか，会計の人が言うわけです。なぜ私が先生なのだと思ったら，「教養部時代にお世話になりました」と。教養部のときには下っ端でいた事務官が，事務の人は２年ぐらいでぐるぐる回るので，全部局に散らばっていらっしゃる。どこかでそういう人がいて，声をかけてくれて，便宜も図ってくれるのですね。病院で診察券をなくしてしまったら，知らない間に再発行の準備をしてくださったり，いろいろ。だから，辻さんがおっしゃった「事務員全員は部長の味方ですよ」というのは本当でした。

それに対して，教員は最後まで，自分の身分よりも教育のあり方が先だという考えの人は非常に少なかったですね。ただ，私がおりました物理教室の中では非常に同感してくださった方がいて，高杉くんにしても下田くんにしても“we are paid for teaching.”で，下田くんなんて「自分は大塚先生を恩師だと思っています」と言って持ち上げてくれるのですね。

よその学科はどうかわかりませんが，とにかく文科系をいつ切り捨てるかをはっきりしてくれなかったら，一切お手伝いできませんなんて言われて，本当にびっくりしました。その方が次の教養部長になられて，１年でしたけれども，やめて，副学長になって，金森（順次郎）さんもその上に乗っかっていたわけで，それでちょっと変な方向にねじれてしまったかなというふうに思うのですけれども。そのねじれ現象が，徐々に元に戻ってくれればいいと思うのですが。

阪大の教養教育について

阿部　大阪大学では平成６年度に教養部を廃止して，全学共通教育機構を設置し，さらにその10年後には機構を発展解消して，現在の大学教育実践センターにつながっております。先生が教養部長の最後のころから，いままで続いている10年あまりの改革を，どのように評価しておられますか。

大塚　遅まきながら，いい方向に行っているなと思います。口幅ったい言い方をするのですが，私が教養部長時代に主張したことは，10年早すぎたというか，遅れても，その方向へ行ってくれつつあるなという感じ。これは評価しているというよりも，自己宣伝みたいな感じなので。まあ，それなりの評価かもしれませんが。

阿部　先ほどフランスのエコール・ノルマルのお話が出ましたけれども，それを一つのモデルにした方向で，教養教育を進めていくべきだ。それは，単に２年間決まり切ったことをやればすむというものではなく，１人ひとりの学生の一生の問題であり，どのような専門の人でも絶えず自分を磨いて幅を広げていかなければいけない。そのことを，阪大で学ぶ学部生に経験してもらう。そういう流れでございますね。

大塚　はい。

阿部　最近阪大では，教養教育は２年間だけ行

えばよいというものではなく，それを4年間かけてじっくりと続け，さらには大学院まで拡充すべきだという趣旨から，コミュニケーションデザイン・センターという組織ができるなどしております。こうした動きは，大塚先生がお考えになったことと，そう変わらないかたちで進んでいる改革と考えてよろしいでしょうか。

大塚　はい。大学院生対象の教養の講義というものまでどうか知らないけど，いろいろな教養の教育を大学院学生も聴いて，それを必要とあれば単位として認めるということは，当然あってしかるべきだと。

それから，これはノーベル賞とは関係ないのですが，バークレイである教授に聞いたことなのですが，物理の先生が全学の学生に物理を教えると。物理の教授だけがそれをしたら，すごくこき使われているようで損ではないかと言うと，それに対する答えというのは，いや，物理学科の学生だって，必要に応じて機械や電気の講義を聴きに行けるから，それは同じことだと，そういうふうに割り切ってくれましたね。

そこまで日本はまだ割り切れていないというか，物理の学生は物理の講義だけしか聴かないと。必要があれば電気や機械の講義，あるいは医学の講義を聴きに行けるというところまで。それが本当の共通教育ではないかと思うので，これもやはり大学教育実践センターという限られた建物の中で，限られた人間だけしかやっていないというのでは，ちょっと。建物はそこでもよろしいですけれども，そこで他の専門の人も受け入れてやれるような活用をしてもらわないとよろしくないのではないかと思います。そういう点では，まだ，だいぶ遅れていますね。

阪大生へのメッセージ

阿部　最後に現在の大阪大学の学生へのメッセージをお願いいたします。

大塚　これは繰り返しになるかと思いますけれども，生涯教育へ，一生かかって身につく教養を獲得しなさいというか。ああいうのは一つでいいと思うのですね。それを中途半端ではなくて頂点まで極めなさい。

結局，幅広く一般教育をやるなんていうことを言っていましたけれども，このピークが高くなれば，すそ野はおのずと広がるわけです。だから，例えば文学なら文学，宗教学なら宗教学でもやれば，その文学だけやっていれば宗教学を知らなくてもいいというわけではない。文学の中で，いま例えば，やかましく言われている『カラマーゾフの兄弟』なんかにしたって，あれは宗教小説みたいなものですよね。

だから自然とすそ野は広がるものだから，それを専門外に一つでいいから持ちなさいということです。

大塚穎三名誉教授略歴

1929年4月　大阪府に生まれる
1942年4月　浪速高等学校入学
1949年3月　浪速高等学校卒業
1949年4月　大阪大学理学部（旧制）入学
1952年3月　大阪大学理学部卒業
1952年4月　大阪市立大学勤務
1958年10月　理学博士（大阪大学）
1962年4月　大阪大学助教授理学部
1968年1月　大阪大学教授教養部
1986年4月　大阪大学評議員（1988年3月まで）
1990年4月　大阪大学教養部長（1993年3月まで）
1993年3月　大阪大学停年退職
1993年4月　大阪大学名誉教授

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Eizo Otsuka

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Eizo Otsuka related to the history of the Naniwa Senior High School and the Osaka University. Professor Otsuka, who was born in 1929, studied at the Naniwa Senior High School in 1942 - 1949, where he experienced the war and the merger of his school into the new Osaka University in 1949. He further studied physics at the Faculty of Science in Osaka University. Graduating from it in 1952, Professor Otsuka belonged to the Osaka City University for ten years, and moved to the Faculty of Science in Osaka University in 1962. He studied physics very hard there, but in 1968, when the students' riot occurred at many universities including Osaka University, Professor Otsuka moved from the Faculty to the Department of General Education within the same university. Thereafter, he made a great effort to improve the general education, worked as Dean during the period from 1990 till 1993, and became Professor Emeritus in 1993.